



「学び」の世界

大学院文学研究科 教授 木 田 章 義

北条家の家訓に「好く道より破る」というものがある。これは「好いた道から、身の破滅が生じる」という意味のようであるが、あるいは、「すきもの」の「すく」で、管弦遊楽、恋い狂いなどの古い意味の「すき」からの連想が働いておれば、「遊楽から身の破滅」が生じるという意味かもしれない。どちらにせよ、人生訓としては立派に役立つものである。ところがこういう家訓の一節を、序文や講演に引用してもあまり感心されることがない。しかし、『論語』の「後生長るべし」というような一句は、序文や講演に引用されると、格段に格調が高くなるとされる。これは、日本に於いて長い間、漢文が教養の基本であったことによる、我々の意識のなせるわざである。その一節が、和文から出たものか、漢文からでたものかが重要なのであって、その内容の当否が基準になっているのではない。明治時代以来、漢文だけでなく、欧米の格言を引用すれば、また格調が上がるようになっていたが、最近では、英語はやや陳腐という感じになりつつある。フランス語の警句などを引用すれば、やはり文化の香りが高いと評価される。こういう場面で、スワヒリ語やアラビ

ア語を使う人は皆無である。京都大学に於けるさまざまな会議の中では、フランス語やドイツ語は知っている人間の数が少ないせいもあって、あまり聞いた



ことがないが、英語は頻繁に出てくる。私のように英語に縁の無い人間には、知らない単語や明瞭に理解できない単語もよく出てくる。運良くその単語の意味を質問することができる場合もあるが、次々と発言が繰り返され、質問する機会を失したまま、帰ってくるということもある。私のようにすごすごと帰る人もきっと何人かはいるはずである。特に、大学全体の会議には英語の使用が多いようである。英語にある種の権威を感じているからであろう。とにかく、このような外国文化に対する敬慕は、奈良時代から一貫して日本文化の中にあった。それが現在でも続いているのでわかるように、日本の文化は、いつも、外国文化を受け入れて、それを

基本として発達してきた。「学ぶ」ことが、文化の基盤にあるのである。

本年度の附属図書館公開展示会では、その「学び」を主題として開催した。日本における「学び」は、中国文化、禅文化、朝鮮文化、キリシタン文化、西欧文化など、いくつか指摘できるが、本年度5月に、附属図書館蔵『幼学指南鈔』が重要文化財に指定されたので、この書籍を中心に展示会が組み立てられ、中国文化をいかに「学んだ」という展示を行うことになった。この『幼学指南鈔』というのは日本で作られた書籍で、中国の典籍に出てくる重要な単語や固有名詞などを掲出して、中国の文学書・歴史書の典拠となる文を抜き出して集成したもので、いわゆる「類書」と呼ばれるものである。現在なら「百科事典」に近いものである。この書籍は、本来は全三十一巻であるが、その内の二巻が本学附属図書館に蔵されている。そのほか、陽明文庫を始め、台湾の故宫博物院などに分蔵されているが、もとは覚瑜という人物の所持本がバラバラに散ってしまったものである。久安三年（1147）という年号が中に現れるので、その頃の成立で、大江時房という人物が幼い頃に与えられたものではないかと言われている（詳しくは展示会図録「学びの世界」の中島貴奈氏解説参照）。

『幼学指南鈔』は、漢詩文を作るときや、中国典籍を読むときなどに必要な知識を能率良く身につけることができるように編纂されたものである。このように漢詩文を読解するための必須単語や知識をまとめたものとして、『和名類聚抄』（源順著、931～938年）や『口遊』（源為憲、970年）なども知られている。これらも、貴族の子弟のために編纂されたものである。このような類書や辞書が編纂されるというのは、漢詩文をたしなむ層がひろがったことと、漢詩文を読み、書くための必須の知識の範囲が限定できるようになったことを示している。類書に

掲載された文献の範囲の知識があれば、日本で必要とされる知識の大半は得られ、その知識があれば、日本での漢詩文作成には問題がないということである。『幼学指南鈔』は、奈良時代から平安時代にかけての、日本における漢文の知識の広がりと限界をも示していると考えても良いだろう。



幼学指南鈔

この展示会では、第一部で、中国を中心とする出版文化、第二部で、『幼学指南鈔』を中心とする類書・幼学書の世界、第三部では中国典籍の消化という三部で構成した。これを別の表現をすれば、第一部は、日本が中国文化を受け入れた背景、第二部は、受け入れる際の書物の選択、そして第三部は、受け入れたものの消化（日本の変容）を展示したと言い換えても良い。この展示を見ると、日本文化がいかに中国文化の影響を受けているのかがよく理解できる。同時に、現在残されている量は限られているが、いかに多くの本が、中国の版本そのままの形で日本で出版されていたか、また、それらの難解な中国語をさまざまな方法を用いて読解し、講義していた様子が明らかになるように展示されていた。ただ、展示会という性格上、現在残されている典籍を展示することしかできないので、この展示会では、中国文化をそっくり模倣している姿、それを日本的に変えたとしても、あくまで中国典籍の理解という形でしか、日本

文化は発達してこなかったように見えるであろう。まるで、日本文化はすべて模倣によって成り立っているように見えるのである。

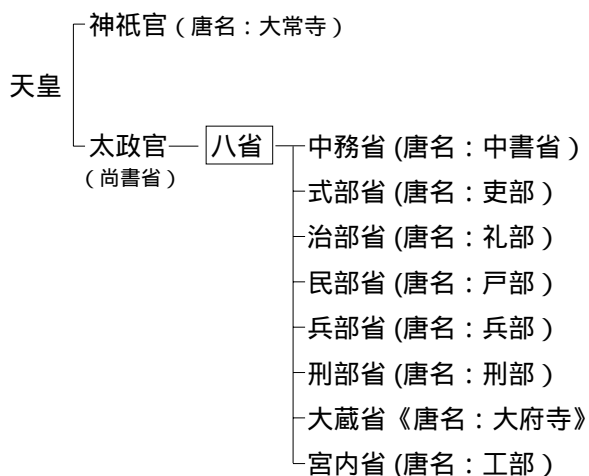
ところが、子細に検討して行くと、日本人の「学び方」には一つの特徴があることが分かる。外国文化をそのまま受け入れていることはごく

「学びの世界」展示資料

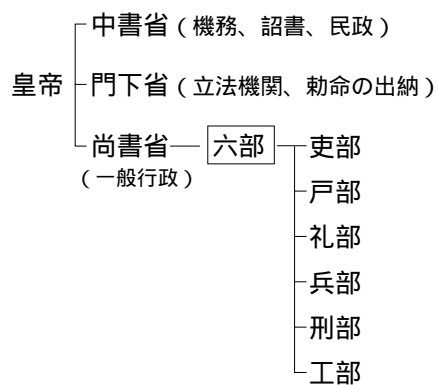


希で、かなりの変形をさせつつ受け入れているようである。たとえば、律令制度についてみれば、律令制度そのもの、土地の管理法、文書のやりとりなどは、確かに中国の模倣であるが、その官僚制度は、

大宝令



となっている。しかし、唐令は、
唐令



九寺：太常寺（礼儀） 宗正寺（宗室） 光祿寺（膳羞） 衛尉寺（軍器杖） 太僕寺（輦輅厩牧） 大理寺（鞠獄定刑） 鴻臚寺（賓客） 太府寺（倉蔵出納）

という形で、三つの役所に分けて職務を分担さ

せて、皇帝が統治する形であった。日本では、神祇官と太政官の二つに分けているが、神祇官は政治的には大きな力を持たないので、実質的には、日本の統治組織は天皇—太政官という形で、権力が集中しているのである。これはおそらく当時の政治体制を反映しているものであると思われる。ここをとらえて上山春平先生は『埋もれた巨像』（岩波書店1997年）という藤原不比等を中心にした国家論を展開されているのである。大日本帝国憲法が三権分立の形式をとっていても、天皇制を維持するために、実際には形式的なものにすぎないものであったのも、当時の実情を反映しているのである。

日本文化に大きな影響を与えているものとしては、仏教もある。この仏教についても様々な宗派があり、一概には言えないのであるが、仏教の中では重要な思想である「輪廻」の思想は、表面上は日本文化の中では盛んに語られているが、実際には、ほとんど入っていない。輪廻の輪を抜けるための修行ではなく、国を守るための修行であり、浄土に移動するための修行なのである。それがはっきりとした形をとったのが、鎌倉仏教である。親鸞の教えの中には、全く輪廻という発想はない。これが日本人にはわかりやすく、また、信じやすい形であったのである。そして親鸞の主張の中に、輪廻を否定する言説が無いところからみても、輪廻という思想は、真剣な信仰の中では、当時でも語られることがなかったことを示している。彼が否定しなければならなかったのは、自力で悟りを開こうとする宗派からの阻害だけであった。

漢詩文の世界も、日本文学に大きな影響を与え続けているが、漢詩文の中の風論詩は、ほとんど日本漢詩の中で詠まれることがない。漢詩の理論やそれを借りた和歌の理論の中に、「風論」という技巧は入れられているのであるが、風論詩を書いた日本詩人はほとんどいない。不遇を述べても社会批判は行わず、花鳥風月を賞で、庭を散策し、酒を楽しむという体になる。

日本文化の中の、外国から入ってきた骨格部分については、見事に、日本的な受容を行っていることが分かる。

このように、物を中心に見た場合には、はっきりと見えないけれども、その棄てた部分を見ていけば、日本人は中国文化の根幹部分をも変更しつつ受容していることが分かる。実は、これは明治に盛んに言われた「和魂洋才」に近い受け入れ方である。日本人固有の精神をもって、西洋伝来の学問知識を利用するという方式で、中国文化に関しても、「心は日本、技術は中国」という形で受け入れているのである。つまり、日本人は、明治時代になって初めて「和魂洋才」という方法を編み出したのではなく、中国文化を受け入れたときに、すでに「和魂漢才」という形で受け入れていたと考える方が良いでしょう。ちなみに、「和魂漢才」という言葉は『菅家遺誠』から始まるといわれている。前後の文章を引用すれば「凡そ国学の要する所、古今を論渉し、天人を極めんと欲すると雖も、其れ、自づから和魂漢才に非ずは、其の閭奥（奥深い所）を闚ること能はず」（続群書類従本）とある。菅原道真著とも言われ、鎌倉時代の奥書のある写本があるようであるが、その奥書が信用できるかどうかは疑わしく、内容から見て、成立はもっと新しいものではないかと思われる。しかし『菅家遺誠』は幕末に版本として刊行されたので、「和魂漢才」という言葉は明治にはよく知られていたらしく、この言葉をもとにして「和魂洋才」という言葉が作られたようである。文学のような、実生活とは離れた部分での中国文化の影響は、嘗々と続くのであるが、実生活や社会体制に関係するような思想なり、制度については、かなり巧みに換骨奪胎して受け入れ、その当時に実際に権力を握っていた人間達が、自らの既得権を生かすように、少なくとも減らすことのないように工夫しながら受容してきたのである。仏教のような思想の場合で

も、現実感のある所までしか受け入れていなかったと言うべきであろう。

千年後、日本地域で発掘が行われ、多くの埋蔵物が出現し、それを分析した学者たちは、日本はアメリカにずっと占領されていたと解釈するかもしれない。あるいはアメリカと同じような文化や思想を持っていたと思ひこむかもしれない。しかし現実、アメリカ的に進む方向ではあるが、「和魂米才」であることを、我々は

よく知っているのである。日本人の「和魂」は根強いと言うべきであろう。

最後に、展示会には国宝級の典籍から未紹介の資料まで、まことに価値の高い文献が、豊富に展示され、一大学で、これほどの展示を行えるのは京都大学くらいだろうと、専門の方々から高評を得たことを付言しておく。

(きだ あきよし)

附属図書館について思うこと

京都大学大学院工学研究科材料工学専攻
修士課程1年 柴田 暁伸

先日、久しぶりに附属図書館に行きました。思えば学部にも所属していたころは試験期間になると決まって附属図書館で勉強しており、結構身近に感じていたような気がします。しかし大学院に進むと研究室に自分の机がもらえ、わざわざ附属図書館まで行くことがなくなっていました。

そこで感じたことは、自分は今まで純粋に本を借りに附属図書館に行ったことがないということです。附属図書館には勉強をしに行くだけでした。つまり図書館=自習室という考えなのです。附属図書館にいる利用者の中にどれだけ純粋に本を探しに来ている人がいるでしょう。ほとんどの利用者が図書館=自習室と考えていると思います。なぜそう思うのでしょうか。それは図書館が静かで勉強に適しているという

ことでしょう。それは図書館の長所でもあると思うのですが、少し寂しい気もします。

私はほかの国立大学の附属図書館には行ったことはないのですが、比較することはできませんが、京都大学の附属図書館は世界に誇れる図書館だと思います。ですがそんな図書館も私は単なる自習室のひとつとしか考えていませんでした。もし他に勉強をする環境の整った自習室ができれば、間違いなく私がそちらのほうに行くと思います。

先日私は附属図書館にある本を探しに行きました。その本は既に絶版となっておりどこの本屋にも存在していませんでしたが、附属図書館で見つけることができました。そのときの感動は今も鮮明に思い出すことができます。そこで私が感じたのは図書館の価値というものは利用者の数ではなく、やはり蔵書の質、量であるということです。自習のためのスペースよりは蔵書の充実のほうが大切なのではないのでしょうか。(しばた あきのぶ)